テレプレゼンスには距離と言う概念は存在しない。
それ自身が何かを生み出すことはなく今日存在する媒体を通して使われるものだが、仮想の中に創られた技術の中では群を抜いて使い勝手がいい。
仮想世界と呼ばれるものを追及する方法は幾何学等で使われる分岐の統計に尽きる。
実世界の構造を追及しいていくとテレプレゼンスは我々の空間感覚からかけ離れているものと実感する。
ウェブ配信はたとえ何千キロと距離が離れていようとまるで身近に存在してるかのような感覚を与えてくれる。例えばオフィスでお互いにスクリーンを通して会議中にしらけた同僚がうっかりその騙し絵のように映し出されたあなたの部屋に入ろうとしてしまうこともあり得るのだ。
さらに存在論について追及していくと一つの疑問が生まれる。
今日においてテクノロジー意外にいったい何が存在の立証をできるかということ。
テレプレゼンスの中にいる私はまさににプレゼンス（存在）している、確かにいるのだ。世界も仮想世界の存在をさらに認知していくべきだ。

韓国の松島新都市にあるビジネス地区で正にこの現象を垣間見ることができる。
２１世紀最高の国際都市を目指し本土より少し切り離された埋立地に建設されたこの都市は未来都市としてはこの上ない状況の下創られた。
実質的かつ投機的データに基づき中松島新都市は未来に向けて主張する。都市はクラウドシステムで覆われるであろうと。
このプロジェクトは都市計画専門家や建築家の夢というより、不動産開発業家やテレプレゼンスサービスを家庭や企業に提供してるCiscoのようなテクノロジー開発会社のそれと言える。
松島新都市はまるで情報に事欠かない慈愛に満ちた主教様の如く語りかけてくれる。都市自身がすばやく動く有能なブレインを持ち我々自身のデータを想像以上に保有しているのだとしたら、それを生かさぬ手はあるのだろうか。
こういったことが開発者の間で普及したのなら、私たちは松島新都市との間にある仮想世界、見渡す限りに続く深淵にも似た亜空間へと自由に行き来できるようになるのだ。
この光明の中、やっかいな存在主義に比べテレプレゼンスは今日の市場にとって代わる存在になれるのだ。
そして社会全体にクラウドシステムが浸透していくにつれ利用者も比例して増えてゆくだろう。

しかし、テクノロジーは我々の負担を絶え間なく軽減させてくれるものだが、同時に思考に対して毒になるという意味も含んでいる。悩むことができるという人間が人間たる能力から我々を切り離してしまう副作用を孕んだ状況、仮想なる世界を体験しているという経験、決して交わることのないこの二つがうまく溶け込むということはないのだろうか？
今私は松島新都市内にある一ホテルの１１階にある部屋の窓より中央公園を眺めながらこれを書いている。
同時に市販されてるCisco製テレプレゼンスカメラがこの風景を録画しパソコンに取り込んでいる。
カメラを作動させっぱなしにし、街が自身のポートレート描いてゆくが、完璧に再現してくれるはずのその機械からは何か全く別のものが送られてきた。
突然の故障、と文字が。

しかしこんな機械はただの鉄と塊のようなものと考えるとひどく自然な事のような
気がする。
そしてここにふたつのポートレート、時も場所も同時に創られた世界が
全く別の二つの世界として。

タイラー•コーバーン | Tyler Coburn
"U" のためだけに
シスコテレプレゼンス PrecisionHD カメラからの映像、テキスト
2014